

十二年の手紙

下 卷

宮本顕治・宮本百合子



筑摩叢書 42

筑摩叢書 42

十二年の手紙

下 卷

宮本顕治・宮本百合子



筑摩書房

宮本 顯治 (みやもと けんじ)

1908年 山口県に生まれる

1931年 東京帝国大学経済学部卒業

著 書——「敗北の文学」「民主革命の諸問題」「共産主義その理論と実践」「人民民主主義革命の展望」「自由と独立への前進」「人民の文学」「百合子追想」など。

宮本百合子 (みやもと ゆりこ)

1899年 東京市に生まれる

日本女子大学英文科中退

1951年 1月21日没

著 書——「宮本百合子全集」全十五巻

十二年の手紙 下巻

筑摩叢書 42

昭和40年5月30日 初版第1刷発行

昭和49年8月15日 初版第16版発行

著 者	宮 本 顯 治
	宮 本 百 合 子
発 行 者	井 上 達 三
発 行 所	株式 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
電 話 東 京 (291) 7651番(代表)
振 替 東 京 4 1 2 3 番

© 1965

(分類)1095(製品)01042(出版社)4604

旺印刷・永興舎

目次

一九四一年（昭和十六年）	5
一九四二年（昭和十七年）	39
一九四四年（昭和十九年）	59
一九四五年（昭和二十年）	137
注	219
あとがき	225

十二年の手紙

下巻

一九四一年（昭和十六年）

一月十二日

巢鴨拘留所の頓治から
目白の百合子宛

七日付の手紙昨日拝見、十日はよく覚えていたね。僕も毎年頭に浮んでいた。たっぷりした祭り日、詩集の見事な頁々をめくる素晴しさ、暖い早春だった。よく思うのだが、そちらの枚数の何分の一かで返事をかくので極度に圧縮することになり、のどかな日常の茶談話まで手が届かず、筋書だけみたいになる。本についてもあれこれの滋味ある良

さについてたっぷり書いて、ユリの労をねぎらいたいが、注文が主のようになってしまいが。困難な条件の中で精進している芸術家へは、暖い評価は土台として必要なので、いつの注文もそれらのことが前提となるのだね。『朝の風』にしても、清らかなリリックで、精神の輝きは決して失われてはいないものであること、あの執筆当時のユリの手紙の通りだとこの間も思った。生きていても通俗小説や芸術的墮落を辿った人達も含めて一切の生活的挫折を示した

人達は、この二十年の文学史の中で何と沢山だろう。芸術的成長、生活的節操、その道歩んでいる良心的作家は何とまれのことだろう。十三日のお祝いの中で数少ない良質の星がこの上ともあらゆる健康を加えて、学問と芸術の世界に輝くよう心から願いたい。星の輝きは、時として雲のため消されたり、嵐の中でその光を下界にまで届かせないことがあるが、波瀾の中で光り続けた値打は不朽のものであり、歴史の中に刻みこまれるものだ。生活者として、芸術家としての不断の成長、これを期待できることは大きな喜びであり、改めて考えれば考えるほどそうであるところのものだ。

中央公論の題、^(三)考えているが先日のもわるくもないね。世代を複数としてとればね。一つの頭から沢山の本を注文されてユリもいささか閉口だろうが、はつきり文集的なものもあっていいね。

友人その他への手紙の返事も少したまった。北海道のおばあさん御元氣そうで何より。二十日にはゆけるといいね。うん、んは相変わらず冷いので、汁にいたりして暖めようとするがその汁がさめていると来てるので、さっぱりで、寒気を催しながら弁当をつくこともある。夕飯は三時前なので、さすがに夜明けは腹べこの感がある。魔法瓶売っているなら一つほしい。古いのは駄目になったし、こちらは

品切だから。牛乳を行火にくっ付けて暖める珍風景も生じる。大体夕方の牛乳は暖めてあるが時には冷いままなので。台所の苦勞いろいろだね。お恭ちゃんたちもこんな工面は御存じないだろう。島田へも近く手紙書き度い。林町へもよろしく。泰子ちゃんも丈夫で大きくなるように。太郎ちゃんは相変らず元氣のことだろう。隆治も風呂には入れるといってくるのでやゝましなのだろう。ユリも早寝以来たしかに丈夫になったね。昔より健康そうではないだろうか。二十三日前よりは、確かに結構のことだ。ではよい十三日を。おくりものも届くだろう。よい薬もあろう。

一月廿五日

目白の百合子から
巣鴨拘留所の願治宛

こんにちは。きょうは寒い日です。きのう神田へまわったら魯迅全集がなくて、きょう、とりよせておいて貰うことにして、さっきお恭ちゃんがとりにゆきました。六巻で十二円よ。でもケーテのことを書いたり、本が出来たり、廿三日だったりにしたこのために買ってもいいと思つて。

魯迅全集は七巻あつて、短い感想が非常にどっさりです。なかに、夫人へかいた手紙が集められているのがあります。なかなか辛苦した夫婦でありました。その手紙は、初めの部分はみんな広平兄という宛名です。コーヘイケイとよみ

たいでしょう。男のようでしょう？　ところが女士あてなの。兄という字を自分は友人や後輩などにつけるので、よびずてよりはすこしましという位の意味だからと説明して居ります。許女史は、初め先生とも思うひとに兄とかかれて、びっくりしておどろいたらしいのよ。そしてきつと、どうして私にそんな兄という字がつけられるのでしょうか！　というようなこと書いてやったらしいのね。そこで魯迅はびっくりしないでよろしい、と説明しているわけです。ずっと後になって、妻になってからのにはH・M・Dという宛名です。このひとは女子大学に働いていてね、そこでなかなかよくやって、一部から害馬(ガイバ)という名をつけられたのです。それでHMなのですつて。Dは何でしょう、英語の出来た人たちですから推察も出来るようです。小鬼はあせつたり氣をせいたりしてはいけません。というようなこととかかれていて。小鬼とは許さんが自分を自分で呼んだ名なのでしょね。いろんな感情、わかるでしょう？　チェホフが、オリガ・クニツベルに与えた手紙もクニツベルはヤルタにいられなくていつもレーニングラードやモスクワにいたからどっさりあつて、いろいろ芸術上有益なこともかかれています。でもチェホフらしさが溢れていてね、「わが馬(ウマ)さんよ」とかいたりしていますが、ゆうべよみながらおなじ馬ながら、HMとクニツベルのロシャートカぶりと

は何というちがいかとつく／＼思いました。それにH・M・Dと頭字だけに表現しているところも、東洋風でしょう。D・L・E・T・D・H・Mこんなに重ったのもあります。そして、日本文に直されている文脈は大変欧文に似た感じですが、etという字もあるところをみると魯迅はフランス語も近かったのでしょうか。親愛が日常のこまかな消息のうちに示されているのも、わかります。月よ花よの佳句もなく、と序文に魯迅がかいていますが、やはりそれ以上の内容と面白さがあります。なかなか大したことも云っています、婦人の文章について。婦人の文章に美辞が多く感歎詞が多いばかりでなく、評論の場合、一々相手の表現を反駁して小毒はある、しかし猛毒はないのが女の文章である、と。なかなかでしょう？ 頂門の一針的でしょう？ 許さんは文章をいつもみて貰っていて、直して貰っていたのですがそれにつれてのことなのです。

私のさがしていた版画の紹介の文章はどうも見当りません。一つ、これかと思うのがあります。しかしスメドレーはケーテと友達だったのですね。一九三五年頃、上海で出版された画集にアグネスが序文をかいているのね。さぞいい本でしょうね。実にみたいと思います。どうか私も、一生のうちには、そのひとの画集に心から序文のかきたいような婦人画家にめぐり会いたいものです。

光子さんなんか或るいい素質はあるのですが、旦那さんの技法、傾向と自分のものの成育との間の衝突で、どうにも苦しかったのです。ニューヨークで、どんな気持でどんなに暮しているのでしょうか。メトロポリタンで本ものを見ているのはいいけれども、表の仕事手つだっている娘さんも又それとして珍らしい位のひとですが、どの位までやってゆくか、このひとはやはり三十越してからが期待されるような資質です。ゆうべも、これでミューズが揃ったと大笑いしました。とにかく文学・音楽・絵画が一つ火鉢のまわりにあつまるのも、こわいでしょう？!

三月十四日朝

巢鴨拘留所の頭治から
目白の百合子宛

その後手紙二通届いた。風邪気味少しとれたので朝一筆という次第。速達以後だから約半月ぶりとなった。風邪中は短い手紙を日頃御無沙汰のところへ若干書いた。さて、ダイヤモンド二月二十一日、三月十一日、お恭ちゃんに頼んでやって貰いたいね。もうこちら三月一日号が入るところだから。お恭ちゃんは夜通いだろし、ダイヤモンド社は昼間開業だからかち合いはしない。新聞をよんでいないものにはこういう雑誌もニュースの興味で待たれているのだから。それを送るとき『樹々新緑』と魔法瓶をたのむ。

ところが大分丹精した花園がこの間からの空っ風で又被害をうけたそうで、全くにくらしい風だがそういう時に、又土地をよくたがやし、肥料をよくやって新しい花の成長の準備をすることで花作り先生の努力も正しく生かされる。僕のヒヤシンスは今満開だ。窓側が狭いからこういう草花が丁度いい。サフランはあと二三輪で終りとなる。今からは長篇、短篇、沢山書きためておくことだね。まとまった着実の文学的研究や、基礎勉強、仕事はうんと多いわけだね。

『十四年間』は、『現代文学論』と似たところ書きなおす要があるね。『二十年間』の著者のところなども。すべてスビーディーのテンポで変ってゆくときだから、作者も現代的テンポで本など準備する必要は全く切実だね。インテキものを作ってはならないが、余り遅々に泰平に構えていると条件が全く変わるから。年表の補充が今ごろされるのは少し呑気風呂だね。清和の地図は悪書だった。ああいう形式だけで悪書を鵜呑みにしてはならない。デマと誤謬が至るところみちているが、こういう分野での少しまじめな知識があれば容易に看破できるものが、『第四日曜』の中のもの、たとえば『夜の若葉』など説明的描写が入ると、場面場面のリアリテイのほかに、全体としてのリアリテイが出てくるし、他のものでも説明的描写が少しあるとよく

分り、のびのびしてくるだろうと思えるものがある。「ごちない」という読書評は形の崩れたこのごろの作品に慣れた眼のせいもあるが、作者の側の考えていいモメントを持っていること、ユリもいつている通りだ。まじめな文学修行をやっているから、手法は良い意味で手堅いのだが、その手堅さの一廻りの成長として工夫も加つていいわけだ。『広場』『おもかげ』などは殆ど間然するところがない。『三二年の春』で概念的説明はよくないと思つたが、具体的、形象的説明は描写の一要素として加えられていいものだ。場面場面の描写的リアリテイはあるが、全体としてのリアリテイ不足が、『夜の若葉』などに感じられるというのと、教訓的だね。『築地河岸』は主人公の心持、少し狭く苦しうだった。あの時期の反映もあるうが。

太郎ちゃんへは時折書くことにしよう。ボンボンもやがて出よう。元気で。

三月十五日

巢鴨拘留所の願治から
目白の百合子宛

そちらの手紙第十三信となつてゐるが、實際は第十四信にあたるね。今日は久し振りの好天気だ。久し振りに、風邪のジワジワ発汗の心持わるさを味つたが、もうこれからは大丈夫だろう。東洋経済、週報、写真週報などが今度一

般の購読雑誌に加えたが、これは週刊だが、何曜発行になつているか、序のときみてほしい。

今度はユリも、全くよく日常の時間を配分して勉強をすすめることだね。よく勉強して来たが、創作と基礎勉強は量質ともに今からの成長にかかっている。一年に、長篇他はつきり予定をきめて幾つか仕上げるといい。読書もコースをちゃんと立てて。短いものの執筆に追われなくても良い条件を最大に利用し、或時間の後には全く豊富な収穫をもったものとなることだね。一人の作家は生涯に、バルザック、トルストイ級の長篇的収穫を持つていいわけだし、沢山の作家が昔から『天路歷程』その他、「暇」な条件の中で大作をものしている。クラウゼヴィッツの『戦争論』も確か死後出たのではなかったかな。違うかも知れないが。哲学、経済の勉強もうんと出来るだろう。幾つもの長篇で輝くのは、今からの勉強次第だ。書物が火事にあわないうに工夫しておかなくてはならぬね。『実業之日本』なんかも防空座談会があるが、物を持って避難すると、その物が導火線となつて火が拡まり、昔の被服廠の惨害もこれが大分因由したとあったが、当つているところもあるう。林町の庭にでもコンクリートの地下書庫でもつくれば本は保存できよう。本は大切にしないとますます入手し難くなるう。今からこそユリの本気の小説勉強がはじまるので、

ジャーナリズムと離れては書く気が出ないのは、本物の作家ではない。

母がこの間旧債整理をやっていると書いて来たので思ったのだが、『猫車』の中の「国広屋」はやはり小説的に別に名を付けた方がいね。愛情をもって書かれているのだから、母たちは負債などをひけめとして感じているのだから、モデルを労わる意味で。『杉垣』の慎一つとめ先も、やはり小説的具体性をもたせて何とか名をつける方が全体的リアリティに役立つ。プーシキンは村の名を伏せたのがあるが、村や県は、小説的創造が不似合のときもあるうが。「生活者としての成長」は全体として誠実と卓見あるものだが、青年達がそれぞれの運命を沈着に云々というところ、非理性的行動に青年が自己の意志でなく結ばれるとき、中にはそれが最も理性的なものと錯覚しているものもあり（それが大部分かも知れぬのだが）、又中には諦観で無気力的に結ばれるものもあり、それらの現象は、「沈着に雄々しく」自己の運命に直面しているとは言ひ難い。「沈着に雄々しい」場合は、「運命」を理性的方向に打開する努力がされているときいえる形容詞だから。全集のために、今からこそよりよき表現のための手入はされているのだから一寸。

写真集二冊朝日の買ったが、面白くなかった。世界史の

転廻もあと数年が峠だと、大戦の経過などからも推定される。太平洋の波も有史以来のあれ方に向っているようだ。健康な精神がいよいよ波多い生活の中では大切となっている。隆治の写真、名札をはって今度送って貰おうかな。南支の話を雑誌でよんだが、なかなかの生活だったようだ。いつか外国へ注文した本は結局未着だったのだろうか。今からは日増しに暖くなり、こちらへ通うのもいささか楽だね。蜜入りボンボンは、僕もみると思わず口があく位好物だった。大柄な花があるそうで、ユリも眼が慰むね。どんな香氣、咲き振りのことだろう。では又書こう。元気で。

三月十七日

目白の百合子から
巣鴨拘留所の願治宛

十四日づけのお手紙をありがとう。風邪がややましになりました。何よりだと思います。きょうなんかすっきり春ね。こちらにも沈丁花の花が咲いているでしょうか。おとなりの庭にあるのが下によく匂います。

十四日づけのお手紙をくりかえしよみました。花園の被害についての話。表現はすこし風がわりですから興味をもっている。文学的考察をしました。そして大変立体的にいろいろの関係を理解しましたから、私もやっぱりそのような詩趣を失わずに物語るのがふさわしいと思います。中

村ムラ夫が、『花園を荒す者は誰だ！』という論文集をかきましたね、昔。結局こんな題の論文なんか書けたのは天下泰平ね。お手紙の中に泰平的テンポのことありましたけれども、あれはむしろ大局的にはいいのよ。何故なら、もし原形のまま出ていたならそれを種として必ず波が立ったのですから。そうすると、これからずっと様々の曲折を營んでゆく上に途が切れてしまう結果になったでしょう。芥川の小説の『極楽』というの覚えていらっしやるでしょう？ 一縷の糸につながって極楽へゆくという話。極楽ではないにきまっているけれども一縷の糸もなきにはまさります、その一縷の糸にいろんな名の人がつながって極楽へ行った云いつたえを信ずればね。仏様はきつと臆病ではないでしょうね。しかし、現実の糸のもちてはまことに競々たるものですから、一縷の糸に一度ジャッキリ缺が入れられでもすると、もう糸を切られたと絶望して、もっていた手を諦めてはなしてしましますから。その糸をいかに巧みにかしく手ぐるかというところに蜘蛛の知慧がひそむわけです。蜘蛛は、アナキネという乙女の化身ですって。アナキネは大変織物が上手で、その美しい織物の技術に、あるギリシャの神が魅せられたのを、その男神の恋人が嫉妬して呪詛で蜘蛛にしてしまったのですって。可哀そうね。

具体的ないろいろのことが大変複雑でむずかしいので全

く閉口です。毎日そのことを研究中です。只今のところ名案皆無です。秋ごろから予定どおり出版企画が実現するとすれば、出版種目は急を要するもの——科学、工業、軍事だけが先になって、文化の方はずっと割合が低下するでしょう。そして、もし今云われているように初版が一千部とぎまって、再版は許可制となるとすれば、許可制の内容は文部省のスイセン図書をみてよくわかりますから、それも極めて小範囲となるでしょう。どんな本やも、特別な文学物の店をのぞいては再版の可能なものの方を選ぶわけですから、その面からも一般に大変落付きを失っているわけです。そういう変化が迫っているということも、私の名案がなかなか浮ばない原因でね。川口松太郎は『蛇姫様』というようなものを書く男だけれども、あまり艶かすぎるということでいざこざがおこって、何とか云われたとき、生活しなければならんだからと云ったならば、それは十分よくわかる、そのためなら何も心配はいらない、満洲へ行つて電気屋になって下さい、足りなくて困っている。すぐ紹介状かきますと云われたよし。実に今日の逸話です。

T・Yという人がいましょう？ 伺いたてたらノートを端から端までめくってみて、居ない。これで見るとよっぽどベイベイだろうということであった由。

私はさびた小刀になってしまふのもいやですが、さりと

て余りのコマ鼠の逞しさで（心の、ね）結局その日そのために本当のかきものができないというのも非常に困ると思います。そういう風な生活のプランをたてたくない。それから永い時間ということは必然で、いわば一生かもしれないから借金生活はいけません。結局つづきませんから。そこで、まことに私の不得手な算術を、ああ足して見てこう引くと、こう引いてああ足すと、とやって小首をひねっております。最低限の安定をどう求めるかという力学のようなことを考えているわけです。その上にくもの知慧もいかして行かないと私はすり切れてしまいますからね。いろんな面で何かの創痍^{きず}がさけられないならば、もっとも肉のあつい部分でそれをうけなければなりませんまい。母親が子供のおしりをぶつても眼の上は打たないように、ね。私はわたしのおしりを見つけたさなければならぬと思います。眼をつぶさないために、ね。そしてその案の一つとしてこの家の便利なたてかたを利用して、二分してつかうと大いにいいですね。今は何にも配給ですから、一人ぼっちでは手も足も出ません。お砂糖にしても一人では一ヶ月八十匁ですもの。さて、実際にその人のことになるは大変むずかしいわけです。何しろこつちがこつちですから。

この前のときはあのときの条件から、強引生活をやって一ヶ年と四ヶ月暮しましたが、あれはいい経験となつてプ

ランを立てるについても今は有益です。ああいう方法ではいかに不可能かということが分っているから。どんなに小さくても自転作業がなくてはなりません。わたしも少しは実際の能力がたかまったというわけです。この点についても御褒美がほしいわ。私たちの最低の安定を発見さえできたら、もう心にかかる憂鬱もなしと勉強して、働いて、ボンボンになぐさめられてやってゆけます。(中略)

「どうしてもわけがわからない、ピンとこない。のみこめず不思議」と寿江子が眼をバチバチやっているのが、無理もないわけね。のみこめるわけがない現象なのだもの。きょうあたりは、何だかいろいろ考えていて、ふっと可笑しくなるようなところもあります。大分御思案だな、無理もない、と。ホラ、ユリ、どうしたい？ と。

きょう税の申告をいたしました、これこそ不合理そのものよ。前年度はたった七百円ぐらいに五十三円ばかりの税でした。五倍だというなら二百六十何円の税というわけです。どこからそれを払ってゆくかということについてはとりたてて問題はしないのね。

こんなに苦心していれば、小説の点のようにどうか展開開いたします。小説はつまり現実のことですから、小説の世界のシチュエーションを考えてゆくように、諸条件をよく調べて、内外の動的な作用をよく観察してプランをたて

れば、きつと最小の展開はいたしましたしょう。感情的にならないで考えられるようになればもう占めたもので、そろそろ大丈夫よ。それは手紙の調子でお感じになれるでしょう？ 何も経験ねえ。子供のひきつけで、はじめ動揺した母さんだって二度目には少しは呼吸がわかります。せんはいいえ大丈夫です、落着いています、そういいながら洗面器の水で手拭をしぼろうとして洗面器のそとへ我知らず手をやっていたようなところを思い出します。やかましく云って下すって、金ダライのありがたがわかって、というようでもあった(以下失くなっている)

三月三十日

目白の百合子から
巣鴨拘留所の願治宛

覚えていらっしやるかどうか、目白の方から上り屋敷の駅へぬける通りに大野屋という米屋があって、そこはこの辺の大地主の一家のやっている米やで、大変いばった米やなの。そこが配給所になったらいやだなと思っていたら、きのうかえりに通ったら大きい白い紙に謹告として、発展的閉店の余儀なきに至りました。うちの配給米屋は目白の消防署の裏です。一週間ごとに配給して来るそうです。一日二人で五合の割で、滞在客は十五日以上もらえる由。冠婚葬祭には特配なしのよし。三度外食のひとつも働

によって食糧がちがつて切符制です。甲乙丙とあります。その点どこも同じになりましたね。何号の御飯という点で。この大野や米やは大した金持故、きつと儲けがなくて人をつかうような方法をとるより一組合員となる方を選び、組合員といっても、達ちゃんの自動車の組で、いろいろの事情が内にあるわけでしょう。でも、やはり一つの風景ではあります。

お手紙の店の消長のこと、私にはよく判っているつもりよ。本当によくわかつているつもりです。私が頭でだけわかつて胸はバタバタしているというのでなくわかつて居ります。ですから、心理的に前のときとは大ちがいです。先のとときは同じ状態でつづいている人達の方へとかく目をひかれがちな心理もありましたが、今はもっと自主的よ。自分としてゆく勉強も仕事の蓄積もわかつていると感じられます。一つには、不安でより合っても、何一つ互に力がないということがはつきりわかつていることもあり、めいめい自分で方策をたててゆくしかないということもわかつている故でもあります。その点でもそれだけ移って来ているわけです。いろいろな推移の中にめいめいのうけようというものが又あるのね。そのこともつよくわかります。その性格的なものの中におのずと救いも亦あるのね。

悲観といううけかたをしていないこと、おわかりになるでしょう？ 私がついて考えているのは、このお手紙で言っていたでしょう？ 一番自分が傷をうけるにいいおしりを見つかるという点です。いずれどこかが無理なのは知れている以上、重点を明らかにして、そのためにはおしりに少しのやけどはしかたもないと思うわけです。ますます芸術家にとって貴重なものとなって来ている時間を一番重点的に充実させてゆくための方法を考えるわけです。

四月十四日

巢鴨拘留所の頭治から
目白の百合子宛

二日と三日付の手紙有難う。土曜日はやはり仕事に忙しかつたのだね。花は届いたが、誰が御持参だったのだろう。念のため、この間の本の名を書いておく、『支那イソップ物語』、『北京の子供』、『小さい人達へ』、『長女』。ヘミングウェイの小説は、刻みは粗末でなくて、退屈なんかしない。柔弱でないロマンだ。下巻は出たろうか。

面会宅下に敷布の破れたのが出ている。修繕して入れてほしい。ミシンでよく縫って貰えば良いだろう。古い手袋も出してあるのだが、一緒に持って行って貰い度い。本の郵送分があるのだが、家がきまつてからにしようと延してある。家についての思案、尤もだね。作家として大切な

ことは、自分のモラルに適した生活形態をいつもえらぶことだから、その意味でも、いつももつとも書生的な生活をし、人手などに頼らないのが本当だと思う。収入の多少に拘らず、生活はいつもその趣旨でくらすのが本筋だ、邪魔な付物があるのは、単純な部屋借りぐらしの妨げとなるのもたしかだが、それも又現実だから、とことんのところではどうしても部屋借りはできないということにはならないわけだ。一人暮らしが一軒家をもち、人手もおかなくてはならないというのは、収入の如何に拘らず、作家のモラルとして望ましくはない。小説の基調としての、作家の日常的基調は実に大切だから。いつか島田行きに、多賀子同伴で行ったが、書生ぐらしを本位とする意味で旅に助手がいるなどというのは、よくないと当時も思っていたのだ。林町では部屋借りとしてはつきりくらせば、却ってその点では書生的になるかも知れない。例えば大森の細君のような人が同居して、手伝い人なしでくれば、今のようないく軒持の生活もいいが、そうでないと永続性はなかなかだろう。経済的にいっても。ユリの小説も、もっと生活の地に足がよくついた方がいいところもあるから、こういう時を書生ぐらしへの転機として活用して、作家としても成長のモメントとするのが禍いを福とすることだろう。

大森の細君のこともよく親身な相談にのってあげるがい

い。だが、生活の発表は、良い真実の生活への尊敬と愛から出ているのだから、その土台をぐらつかさないでいる限り、忍耐と努力で、今からでもどちらもより良くして行かなければならないものだろう。気持ちが続かないということもその土台がなくなったのが基因となって居れば、相手の生活にその土台がある場合、つづかなくなったという方が、大きく云えば、生活破産ということになるのだが。つまり時間と条件を、善意と努力で克服出来ないという破産だ。単純に尤もだと云えない場合と思う。

この手紙は約十日振りだ。では元気で。

四月十六日

巢鴨拘留所の願治から
目白の百合子宛

僕のところへも隆治から葉書が来た。戦争のあるあたりへ行っているらしい。今度宅下する本の中から『山とスキ』と『戦地写真集』送ってやって貰おう。こちらからだと包みが普通だから破れるかもしれない。この間頼んだ森長さんへの伝言、忘れないように。

このごろは、早起はどうなっているかね、この間ごろ、やゝ寝坊と顔に書いてあったようだ。これも一つ、久しぶりに知りたいものだね。小説の地についている云々の話、例えば『朝の風』で、女一人が家をもたねばならぬことが、